

社会背景と共に振り返る中学校教育

寄稿 東京都新宿区立四谷中学校校長 谷合明雄

たにあい・あきお◎東京都教育委員会主任指導主事、新宿区立牛込第三中学校校長等を経て、現職。全日本中学校長会生徒指導部長、社団法人青少年育成国民会議理事などを歴任。主な著書に、『多様な展開で創る授業モデル 中学校道徳編 第3学年』（共編著、明治図書）等がある。

昭和50：59年
（1975～84）

昭和60：平成6年
（1985～94）

平成7：16年
（1995～2004）

平成17年
（2005～）

教育の人間化に向けて

教育の個性化に向けて

教育の総合化に向けて

教育の協働化に向けて

「ゆとりと充実」の標榜と深刻化する校内暴力の嵐

昭和50年代（1975～）は、低成長・同時不況、オイルショックがあり、「不確実性の時代」と言われ、暗い世相へと突入していった。「およげ！たいやきくん」が巷で大流行したのも、こうした世相を反映したことである。

「インベーダーゲーム」が流行したのもこのころだ。

高校進学率は9割を超え、国の教育施策は量的拡大から質的向上へと転換した。昭和49（1974）年の教頭職の制度化に続き、昭和51（1976）年に主任制度が導入された。昭和52（1977）年告示の学習指導要領は、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな生徒を育てようと、「ゆとりと充実」を標榜しつつ、50分授業、授業時間の削減等の特徴があった。昭和40年代から深く潜行し続けてきた生徒指導上の課題が顕在化し、「落ちこぼれ」や「ツッパリ」といった言葉が広まり、生徒の暴力行為の嵐が学校に吹き荒れた。

個性化の流れの中で教育の質の向上・充実に向けた取り組みの開始

昭和60年代（1985～）に入ると昭和天皇の崩御により激動の昭和史が終焉。いわゆる「冷戦」が終結し、ベルリンの壁が崩壊、東西ドイツが統一されるなど、世相が大きく動いた。

昭和62（1987）年の臨教審第4次答申では、昭和46（1971）年の「四六答申」に端を発した「個性重視」の考え方が「個性重視の原則」として集大成され、生涯学習社会への移行、変化への対応が強調された。昭和50年代に猛威を振るった校内暴力は下火となり、代わって「いじめの問題」が表面化してきた。

平成元（1989）年告示の学習指導要領では、「新学力観」「個性を生かす教育の充実」が盛り込まれた。平成4年（1992）年には学校週五日制が開始（月1回）。進路指導改善の一環として平成5（1993）年から業者テストの使用を自粛し、偏差値に依存しない進路指導への転換が促された。

地方分権化の流れと自由・選択・自己責任の追求、生きる力の育成

この時期、連続と続いてきた社会システムが制度疲労を起こした。大手金融機関が破綻し、構造改革と規制緩和、地方分権化等が進み、社会は大きな転換期を迎えた。

そうした世相を反映してか、二ト、フリーターが増えていった。また、不登校生徒が増加、学級崩壊等の問題行動の低年齢化も進行し、「キレる子ども」に代表される子どもたちの衝動的な行動が問題となった。

平成10（1998）年告示の学習指導要領は、「生きる力」の育成を基本としつつ、「総合的な学習の時間」の導入や「選択教科の拡大」等、個に配慮した総合的な学力が重視された。年間総授業時間はそれまでの1050時間から980時間にまで削減。二年後、完全学校週五日制が実施された。私立学校に比べて公立学校の学力低下が指摘され、緊急アピール「学びのすすめ」が文部科学省から平成14（2002）年に発表された。

コミュニティの再生の中で、協働体験とコミュニケーション活動の充実

団塊世代の大量退職時代を迎え、多くの優秀な人材が地域に戻ってきた。コミュニティが果たしてきた、人と人とのつながりや思いやりといった機能を復活させるため、こうした人々を吸収して「まち（街）」機能の回復を図ることが急務となっている。学校にも、保護者や地域と共にその一翼を担うことが求められている。

平成20（2008）年告示の学習指導要領は、「生きる力」の育成を基本理念としている。教育基本法等教育三法の改正を受けて、「個人の自立」や「他者や社会との関係」、国際社会に生きる日本人としての資質・能力の育成等の観点を踏まえている点に、特色がある。改善事項としては、体験活動やコミュニケーション能力の育成を含む言語活動、道徳教育などの充実が挙げられている。必修教科の授業時数は、週29コマ、3年間の合計は3045時間に増加する。

私と『進研ニュース』『VIEW21』



教育問題カウンセラー 駒木根文幸 先生
◎1954～91年 東京都内小・中学校教師。その間、日本経済教育センター編集専門委員を務める。元・ベネッセ教育研究所（現・ベネッセ教育開発センター）顧問。

私は、『進研ニュース』創刊時から陰になり日向になり誌面づくりのお手伝いをしてきました。常に「教師の心を掘り起こす」情報を提供できればと思っておりました。今後の『VIEW21』もそうであってほしいと願っています。

創刊のころ、私は都内の中学校で教師をしていました。当時は「落ちこぼれ」が大きな問題になっていました。だれもがわかる、だれでも伸びる授業を目指して、教材の選び方や指導法などいろいろな工夫を凝らしていました。今、現場では、教師が狭い意味での「学力」を教える機械になることを余儀なくされていて、「心」など、人間として大切なことを教えることが難しくなっているように思います。

『VIEW21』には、社会から尊敬され、熱意と使命感を持って指導する先生方を少しでも増やし、応援する存在であってほしいです。



東京都台東区立浅草中学校副校長 増田律子 先生
◎教職歴31年。数学科担当。

昭和50年代から60年代にかけて、学校では「荒れ」が大きな問題になっていました。職員室の席を温める間もなく、生徒指導に飛び回っていました。当時は、現在ほど若手教師への研修が手厚くありませんでしたが、教育に関する情報紙・誌はたくさん回覧されていました。

『進研ニュース』には、同世代の先生の実践が掲載されており、「これなら自分でもできそう」と心強く感じたのを覚えています。タブロイド判で読みやすく、配られたらすぐに目を通しました。「ほかの先生や保護者にも知っておいてほしい」と思った情報は、学年便りに取り上げていました。



東京都八王子市立ひよどり山中学校校長 磯谷律子 先生
◎教職歴37年。保健体育科担当。

平成6年度から14年度まで学年主任、進路指導主任をしていました。当時は、あり余る生徒のエネルギーをいかに行事や学級活動などに向けるかに大変苦しんでいました。休み時間は常に生徒と一緒にいるようにし、給食を食べる暇もないほど多忙でしたが、充実していた気がします。

『進研ニュース』で思い出深いのは「わたしが選んだ仕事」という職業紹介のコナーです。記事をすべて切り抜いて台紙に貼って、体育館の壁に貼りました。生徒には、興味のある職業について記事の内容をメモさせ、その仕事に就くためには日頃からどうすればよいかを考えさせる授業を行ったのを覚えています。



長崎県大村市立郡小中学校教諭 刈山弘全 先生
◎教職歴16年。研究主任。数学科担当。

平成17年度から3年間、前任校で研究主任を任されました。それまでは、自分の担当教科である数学の指導ばかりに関心が向きがちでしたが、学校全体をまとめる役割を経験することで、数学と他教科・他領域とのつながりを考えて、全教育・活動をバランスよく展開することの大切さを学びました。

『VIEW21』は、自己研さんのほかに、教育動向に関する記事を校内研修で配ったり、紹介されている調査データを自校のデータと比較したりする際に使っています。悲しいニュースが目まぐるしく現在、多くの中学校は生き生きと頑張っていることを積極的に伝えてほしいです。